

## 博士学位請求論文審査報告書

報告番号 甲 乙 第 号

氏名 小関 健太郎

論文題目 不完全対象の形而上学と志向性の論理  
——マイノング対象論とフッサール現象学の現代的考察から——

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授 柏端 達也  
文学研究科委員

副査 慶應義塾大学文学部准教授 峯島 宏次

副査 慶應義塾大学名誉教授 岡田 光弘

副査 東京大学大学院総合文化研究科准教授 藤川 直也

### 論文概要

本論文は、オーストリアの哲学者アレクシウス・マイノング（1853-1920）の「不完全対象」の理論の精確な解釈を通して、その形而上学体系を現代的に再構築するとともに、哲学史的により広い観点から、いわゆる志向性理論への「不完全対象」概念の応用可能性を提示しようとする論稿である。不完全対象とは、未規定性を伴う対象のことであり、すなわち、何らかの規定または性質Pに関してPであることも非Pであることも成り立たない対象のことである。不完全対象の概念は、哲学において重要なテーマを構成しうるさまざまな基幹概念に対してあてはまる。たとえばフィクションのキャラクター、知覚や信念といった志向的態度の対象、可能的なまたは未来の対象……等々が、上述の未規定性を伴う対象とみなされる。本論文は、不完全対象という重要概念に焦点を当てたマイノング哲学の精密な研究であり、その現代的な再構築である。本論文ではさらに、マイノングの考える不完全対象と、中後期フッサールの志向性理論における「ノエマ」概念との対比と接続が試みられる。第Ⅱ部におけるそうした試みは、現在の道具立てのもとで為される分析と考察であり、その点で本研究は、マイノング主義の現代への復権を志し、今日の形而上学の発展にも寄与しうるものである。

論文の構成は以下のとおりである。

序章

議論の背景

本稿の目的と方法

本稿の構成

## 第I部 不完全対象の形而上学と論理

### 第1章 不完全対象の理論

- 1.1 緒論
- 1.2 トファルドフスキの一般対象の理論
- 1.3 マイノングの不完全対象の概念
- 1.4 事態論に基づく不完全対象の特徴づけ
- 1.5 不完全対象の存在未規定性
- 1.6 まとめ

### 第2章 不完全対象と真理

- 2.1 緒論
- 2.2 事態の存在論と真理
- 2.3 未事実的な事態と存在の問題
- 2.4 形而上学的不確定性
- 2.5 まとめ

### 第3章 不完全対象と一般真理

- 3.1 緒論
- 3.2 一般真理の原理と選言的規定の問題
- 3.3 代表としての不完全対象：「完全化された」不完全対象
- 3.4 形式理論：超付値意味論
- 3.5 超付値意味論における選言と一般真理
- 3.6 まとめ

### 第4章 不完全性と可能性

- 4.1 緒論
- 4.2 未事実性と可能性
- 4.3 様相と内付性の概念
- 4.4 内付性概念の課題
- 4.5 真にするものとしての事態と様相的真理
- 4.6 十分性としての内付性
- 4.7 まとめ

## 第II部 志向性の理論

### 第5章 志向性理論における不完全対象

- 5.1 緒論
- 5.2 不完全対象と志向性
- 5.3 現前化の図式における不完全対象
- 5.4 思念と不完全対象
- 5.5 不完全対象とノエマ再考
- 5.6 マイノングの理論の課題と展望
- 5.7 まとめ

## 第6章 志向的对象と文脈

- 6.1 緒論
- 6.2 フッサールの多様体論と存在論
- 6.3 『志向的对象』草稿と志向性理論
- 6.4 多様体と事象内容性の問題
- 6.5 形式的なものとしての多様体と可能世界
- 6.6 まとめ

## 第7章 志向性と可能性の現象学的モデル

- 7.1 フッサールのノエマ概念と志向性
- 7.2 志向性の可能世界分析
- 7.3 ノエマの二つの解釈とそのモデル
- 7.4 「志向された限りでの世界」と対象
- 7.5 新しいモデルと可能世界分析
- 7.6 まとめ

付論：意味論と応用

### 各章の要約

本論文は大きく二つの部分に分けられる。第I部では、アレクシウス・マイノングの不完全対象の理論を現代的な観点から検討し再構成する。第II部では、マイノングの理論を志向性に関するエトムント・フッサールの理論と比較考察し、志向性の理論における不完全対象概念の役割と応用可能性を明確化する。

第1章では、マイノングの不完全対象の理論が歴史的な背景を踏まえて特徴づけられる。とりわけ、「不完全対象」概念の重要な先駆者とみなされる、同じオーストリアの哲学者カジミェシュ・トファルドフスキの「一般対象」の理論との比較のもとで、マイノングの理論の特徴が描き出されることになる。小関君は、トファルドフスキの「一般対象」が個別

対象の代表とみなされるのに対し、マイノングの「不完全対象」が理想的対象として扱われることに注目する。そして、トファルドフスキにおける未規定性の説明が部分全体論的な枠組みを背景にしているのに対し、マイノングにおけるそれは事態論的な枠組みにおいて為されるという点を指摘する。さらに第1章では、マイノングにおいて未規定性が、不完全対象の性質に対してだけでなく、その存在に対しても主張されるということが強調される。

第2章では、不完全対象すなわち未規定的な対象と命題の真理との関わりが、トゥルースメイカー理論の観点から論じられる。そこでは、事態が命題のトゥルースメイカーだと考えられる。マイノングの理論においては、不完全対象のもつ未規定性に依拠する事態を説明するために、「未事実的な事態」が導入されている。本章では、未事実的な事態の存在論的身分として、そのような事態を存在者でも非存在者でもない存在未規定的な対象として特徴づけるマイノングの立場が擁護される。さらに、そうしたマイノングの考えを、形而上学的不確定性をめぐる現代の議論の文脈に位置づけることが試みられる。

第3章で論じられるのは一般真理の問題である。それは、トファルドフスキの言う一般対象を、マイノングの理論の枠組みにおいてどのように捉えたらよいのかという課題を形成する。この章で小関君は、個別対象の代表としての不完全対象 (cf. トファルドフスキ) が、マイノングの理論枠組みのもとでは、単なる不完全対象ではなく「完全化された不完全対象」と呼ばれうるものになることを明らかにする。そのうえで、マイノングによる不完全対象の完全化の理論が、いわゆる超付値に基づく意味論の観点から再構成できることを論じている。

第4章では、事態と様相の関係をめぐるマイノングの議論が検討される。マイノングは『可能性と蓋然性について』において事態論に基づく様相理論を展開している。マイノングによれば、事態のあり方には、事実的 (成立)、非事実的 (不成立)、およびその中間的段階としての未事実的の三つがある。そしてそれらはさらに「内付性」を有するかどうかによっても特徴づけられる。内付性の概念はマイノングの様相理論全体に関わっており、とりわけマイノングは、内付性の概念を用いて未事実性と可能性とを区別している。とはいえマイノングの内付性の概念をめぐっては、彼の様相理論の諸要素との両立可能性が問題にされてきた。本章において小関君はマイノングの内付性の理論に対して整合的な解釈を与えることを試みている。

第5章からが本論文の第II部である。第5章においては、マイノングの志向性理論が中心的なテーマとして論じられる。著者の小関君は、マイノングの志向性理論についての従来の間接実在論的な解釈に抗している。小関君によれば、不完全対象は主体と対象とのあいだに挟まる第三項ではない。そうではなく、主体は対象を能動的に志向 (思念) し、対象は不完全対象として準現前されるのである。小関君はさらに、マイノングの理論をフッサールの志向性理論の現代的解釈と比較することにより、マイノングに対して向けられて

きた批判に応えるとともに、マイノングの考えとフッサールの「ノエマ」概念との類比性を詳細に検証する。そのうえで小関君は、フッサールの理論と比較した場合のマイノングの志向性理論の課題を明らかにしようとしている。

第6章では、本論文のテーマである不完全対象に基づく志向性理論のアプローチに対するオルタナティブを検討する。それは、文脈に着目するアプローチであり、『志向的对象』草稿におけるフッサールの議論である。この第6章で著者の小関君は、フッサールが「多様体」と呼ぶものの一種を、志向的对象の文脈として想定できることを論じている。フッサールの多様体概念は、文脈としての世界という見方を、より広い意味のもとに把握することを促すものである。

第7章で小関君は、フッサールの「ノエマ」概念の解釈問題を志向性の可能世界分析の観点から考察し、フッサールの志向性理論のあらたな形式化と擁護を試みている。小関君は、ノエマを志向された限りでの対象として理解するいわゆる「東海岸解釈」を採用する。そして、ノエマの東海岸解釈において不完全対象と文脈がどのような役割を果たすかを明らかにし、東海岸解釈に基づく志向性のモデルに対して形式意味論的な枠組みを与えようとしている。

## 審査要旨

本論文は二部構成であり、マイノングの哲学について考察した第I部と、マイノングとフッサールを対比的に論じた第II部から成っている。いずれの部も、テキストの精緻な読解に裏打ちされているだけでなく、著者自身の理論構築と哲学的提案を含む意欲的な論稿であると言える。また本論文は、今日の論理学や現代形而上学の成果や手法を十分に咀嚼し、巧妙に踏まえている点でも特筆に値する。とりわけ各章で展開されるアイデアは非常に豊かなものであり、第I部、第II部ともにそれぞれが独立の学位請求論文として展開せられそうな充実した内容をもっているという（誇張のない）評価は、審査委員の一致するところである。

アレクシウス・マイノングについては今日多くの人々が「重要な哲学者」として語るであろう。自らの立場に「マイノングアン」のラベルを貼る者もいる。しかしながら、マイノングの哲学そのものに対する体系的で詳細な研究は、世界的に見ても多いわけではない。とりわけ我が国においてマイノング研究は例がきわめて少なく、その意味で、本論文は先駆的で本格的なマイノング研究として高く評価することができる。著者の小関君は、マイノング主義において重要な位置を占めるとされてきた「不完全対象」について、とくにマイノング自身の事態論との関係に注目して、哲学史的側面と理論的側面の両側面から詳しく論じている。さらに、不完全対象の問題を、マイノング哲学の文脈においてだけでなくトファルドフスキやフッサールといった哲学者の対応の議論との関連においても論じている。それらの点はいずれも、小関君の研究の独創性と包括性を示すものである。また、マ

イノング研究によって得られた諸成果に対して、すぐれて現代的な観点から論理的かつ形式的な再構成および定式化を与えていることも、本研究の特長であると言える。

次に、本論文の展開に沿った評価を記しておきたい。

第1章と第2章では、マイノングの哲学における重要概念「不完全対象」の特徴づけと現代的な再解釈が為される。小関君はその特徴づけを、トファルドフスキの一般対象理論との対比で行なっており、そしてさらに、とりわけマイノング自身の事態論との関わりに注目して行なっている。そうした観点は小関君独自のものであり、本研究の分析に深みを与えている。また、マイノングの不完全対象の理論を、現代的な存在論や真理論として再構築している点でも、本論文は評価することができる。

第3章と第4章は、マイノングの哲学と、現代の形式意味論や様相論理等の道具立てとの接続可能性を、鮮やかに示唆している点で注目される。例として第3章においては、一般対象のもつ一般真理に関する重要な問題が論じられる。それはすなわち一般真理の原理に対する選言的規定の問題——たとえば一般三角形について「直角でも非直角でもない」と「直角であるかまたは非直角である」がともに成立することになるといった問題——である。小関君は、不完全対象に関するマイノングの議論を踏まえつつ、その問題に対する解答が、より現代的な超付値的な意味論のもとで展開可能であることを、説得的に示している。

第5章と第6章と第7章では、マイノングの不完全対象の理論と志向性理論との関連が論じられる。これらの章は、志向性という重要なトピックに対して、本論文の第I部における分析がもつ応用可能性を提示するものである。第6章で小関君は、フッサールの志向性理論に着目して、それをフッサールの多様体概念と関連づけ、志向性理論における対象の文脈について新しい見方を示している。第7章では、不完全対象とその文脈（可能世界）を取り入れた志向性の新しいモデルと意味論を提案し、それをフッサールの志向性理論に対する解釈論争の文脈に位置づけつつ擁護している。第II部のこうした方向性は、本論文のアプローチのさらなる展開の可能性を示唆する意欲的な取り組みとして、評価することができる。

本論文のもつ精密さと独創性、斬新さについては審査委員の評価が一致したが、いくつかの点で、今後に向けての要望や内容に関する疑問が本論文に対して出されなかったわけではない。

上に述べたように本論文はアイデアの豊富さと関連するトピックに対する包括性を特長としている。しかしそれゆえに、その豊富さや包括性に比して記述が「駆け足」になっているように感じられる部分がある。より多くの読者からのアクセスを容易にするためには、もうすこしゆっくりとした筆致で書かれる必要があったかもしれない。同様に、第I部と第II部の接続に関して（両者の内容が衝突しているということはないものの）あとすこし割く頁を増やして解説するとよかったかもしれない。また、本論文の個別的な箇所につい

ても、たとえば著者が採用する意味論における「状況」や、超付値理論における「真理」の概念の正確な内容について、あるいは、第2章で登場する「フォールスメイカー」概念や、第6章に登場するフッサールの「多様体」概念の扱いについて、さらに、ノエマと対象とのあいだの「同一性」をめぐる著者の主張の妥当性について、本質的な質問があった。論文中の定式化の適切さに関しても、マイナーではあるがテクニカルなくつかの指摘があった。

とはいえ、上記の質問や指摘のいずれに対しても、著者の小関くんは審査会の場において十分に補足・応答することができた。指摘された点はすべて、むしろ今後の研究の発展や彫琢へとつながっている。総じて見れば小関健太郎君の学位請求論文が非常に高い学術水準と独創性を備えていることはまちがいない。それゆえ、本審査委員会は小関君の論文を学位授与に十分にふさわしいものと判断する。

令和5年11月3日 審査担当者一同